

原因不明の腹痛

Abdominal Pain of Unknown Etiology: I. J. Sarfeh (*Amer. J. Surgery* 132: 22~25, 1976)

この研究は、原因不明の腹痛を訴える成人患者のとるべき経過に関する手がかりを与える何らかの criteria があるかどうか、それらが診断と試験的開腹のための繰返しの入院を減らしうるかどうかを決定すべく計画された。

1968~71年の原因不明の腹痛患者 64 人を対象とした。うち 46 人は女性。経過観察中女性の 67%、男性の 22% では改善をみず、若い人では改善率がよかった。2 週間以内の症状を有する患者では、その 65% は改善し、腹痛の原因疾患も 25% に診断可能であった。ところが 3 カ月以上の有症状の患者では、改善が 14%、診断のできたものも 9% と少なかった。なかでも女性の場合は改善が期待されず、しかもその症状を説明しうる疾患をもっていないらしいとの成績を得た。

試験開腹をうけた患者では、症状の改善を認めなかった。このことは試験開腹が、重大疾患のない患者に対して安心させる効果があるとの考え方を否定する。試験開腹は、36% の患者で診断確定のために行なわれたが 1 例でのみ十二指腸潰瘍の診断がなされた。他の診断の可能であった例はすべて非手術的になされ、他の報告と同様に試験開腹は失敗した。まとめると、原因不明の腹痛患者につき、次の事項を考慮すべし。

(1) 症状を起こしている原因疾患の発見の可能性は痛みの持続が 2 週以下の際大であり、ほとんどは原因がわからなくても最終的には治癒する。(2) 3 カ月以上痛みの持続する

婦人では、重大な疾患はなさそうで症状の改善の見込みも薄い。(3) 手術による痛みの原因の解明は難かしい。(4) これらの患者での症状の改善率は、試験開腹によって上昇をみない。(5) 痛みを説明する疾患を有する患者のうち早期試験開腹をせず、継続的観察をしたことによって不利益をこうむったものはほとんどない。

以上により、ノイローゼにかかっている患者での不必要な手術を避けられる。継続的観察と患者を安心させる医師の指導が必要である。

非 A、非 B 輸血後肝炎の予防における予防的 γ -グロブリンの効用

Efficacy of Prophylactic Gamma-Globulin in Preventing Non-A, Non-B Post-Transfusion Hepatitis: R. G. Knodell, M. E. Conrad, A. L. Ginsberg, C. J. Bell (*Lancet*, March 13, 1976, p. 557~p. 561)

この研究は、 γ -グロブリン (以下 γ -g と略) の予防的投与が、輸血後肝炎の程度と頻度に何影響をもたらすかどうか、そして高力価の HBs 抗体 γ -g と市販の γ -g との間に、予防効果の優劣があるかどうかを知るために行なわれた。

平均 12 本の輸血を受けた 279 人の心臓外科患者を対象とし、高力価 HBs 抗体 γ -g、普通の γ -g およびプラセボ (アルブミン) のうちの 1 つが、手術前に無作為に選ばれた患者に筋肉注射された。術後 9 カ月間の経過観察がなされ、うち 47 人 (全体の 17% に相当) に、術後 14~180 日に著明な SGOT の上昇がみられた。これらの内訳は、プラセボグループの 94 人中 24 人、正常グロブリン

ープの 93 人中 12 人、高力価グロブリンでは、92 人中 11 人の発症をみた。このうち B 型肝炎の感染の証拠のあった者はわずか 3 名で、他は Cytomegalovirus 感染者が 3 名、A 型肝炎あるいは Epstein-Barr virus の感染例は 1 例も認めなかった。

B 型肝炎被曝の血清学的証拠を示すものは、高力価グループでは 1 人、プラセボグループでは 5 人、 γ -g グループでは 7 人あった。慢性の抗原保持者は、どのグループにも認められなかった。大半の肝炎患者では、原因が分らなかったが、 γ -g が効あるゆえに感染であることが示唆された。黄疸のある肝炎患者は 10 例で、高力価グループで 1 人、正常 γ -g グループで 1 人と両者間に差はなかった。しかしプラセボグループでは 8 人に認めた。このデータは、 γ -g は黄疸性輸血後肝炎の頻度をへらしたことを示している。肝炎全体では、プラセボグループは、 γ -g グループの 2 倍の頻度を示し有意の差があったが、高力価グループと γ -g グループ間には差を示さなかった。

以上の結果から、輸血前の γ -g の使用は、輸血後肝炎の程度を軽くし、頻度をへらすように思われる。この研究で、 γ -g と高力価グロブリンとの間に差がないことは、輸血後の B 型肝炎の減少によると思われる。今日血液銀行では、いろいろな方法で HBs 抗原の発見に努めている。大半の輸血後肝炎は、はじめから非 B 型肝炎である事実で説明される。通常力価の γ -g が、高力価のものと比べて、輸血後肝炎を防止するのに同じ効力を発揮することから、高力価グロブリンの生産は必要なかろうと結んでいる。

(愛知県がんセンター第 1 内科

小林世美 抄)